



四季

第8号(12月)

～四中の季節～

- 教育目標
- 自分で考え進んで実践する人間
 - 公共心に富み情操豊かな人間
 - 勤労を尊び責任を重んじる人間
 - 健康でたくましい人間

『耐える』ことの先に…

校長 関 勝 志

紅葉の色鮮やかな季節が過ぎ、正門の桜や梅、けやきの葉もすっかり落ちて、冬の訪れを感じます。落葉樹が葉を落とすのは、日照時間が短くなる冬にエネルギーをむだにしないことや、水分が葉を通して出ていくことを防ぐためと考えられています。植物は暖かい場所に移動したり、土の中にもぐったりすることはできません。草木が冬を越す準備を始めています。

「耐雪梅花麗（雪に耐えて梅花麗し）」

これは、薩摩藩の武士であり、明治初期に政治家としても活躍した西郷隆盛が詠んだ漢詩の一節です。梅の花は、冬の雪や厳しい寒さを耐え忍ぶからこそ、初春に美しい花を咲かせ、かぐわしい香りを発する。苦難や試練を耐えて乗り越えれば、大きく見事な成長が待っているというたとえであり、成功するには忍耐が不可欠だということを表しています。

「If Winter comes, can Spring be far behind? (冬来たりなば春遠からじ)」

これは、イギリスの詩人シェリーの「西風に寄せる歌」の一節です。つらく厳しい時期を耐え抜けば、その先には幸せが待っているというたとえです。

人生に置き換えてみると、つらく厳しい時期は冬に限らず、また、誰にでもあるものではないかと思えます。しかし、自身の努力ではどうにもならないこともあります。そんなときは、我慢せず、できるだけ早くSOSを出して、助けを求めることが大切です。ここで言う「我慢」とは「心身の苦痛を感じているのに訴えたい気持ちをおさえること」です。その先に何も得ることはありません。いじめや体罰、性的暴力などは、絶対に我慢してはならないことです。

一方、何か目標に向かう過程にある、つらく厳しい時期については、どれだけ諦めずに耐えられるか、努力できるかが、その後の人生を左右します。「耐える」とは「困難なことにへこたれず持ちこたえること」です。高い目標を達成したり、大きく成長したりするためには必要なことです。その先にある目的やゴールがはっきりしています。

3年生の高校受験も、いままさに冬から春へ、つらく厳しい時期を乗り越えようとしています。これまで蓄えてきた力を発揮する時期を迎えています。将来の夢や目標をしっかりとつとめ、自分の意志で受験校を設定し、試練に耐えて、その志を貫いてくれることを期待しています。中学校での学習は決して高校進学がゴールではありませんが、人生の進路選択という意味では大きな目標です。1・2年生の時期をしっかりと過ごす（学習する）ことが大切です。

スポーツの世界でも、つらく厳しい時期を乗り越え大成したアスリートが多くいます。サッカーワールドカップで決勝トーナメント進出を決めた日本チーム「サムライブルー」にも言えることでしょう。ドイツ戦やスペイン戦の前半を0対1で耐え抜き、劣勢でも勝利を信じて戦い抜いたことが、奇跡（必然）の逆転につながりました。多くの人に感動と希望と勇気を与えてくれました。



部活動でも、子どもたちが耐えて変化し成長している様子を見ることが出来ます。1年生にとっては、入学してから始めた部活動であれば、なかなか上達せずにジレンマ（葛藤）を感じていた子どもたちも多いと思います。また、2年生は、代替わりで3年生から引き継いだばかりで、どうやって1年生をリードし部をまとめていけばよいか悩んでいた子どもたちも多いと思います。きっとその人にしか分からないつらく厳しい時期があったはずで、つらいから、厳しいから、上手いから、結果が出ないからという理由で諦めていたら成長はありませんが、夏を過ぎ、練習試合や大会、発表会等での子どもたちの姿を見て「上手くなったなあ〜」「こんなことができるようになったんだ」と感じるのがよくあります。子どもたちにとっては、一つのつらく厳しい時期を乗り越えたのかもしれない。

それでは、私たち大人が考えなければならぬことはどんなことでしょうか。子どもたちが困難に直面したときに、「無理に我慢している」のか、それとも「目標に向かって耐えている」のかをしっかりと見極める必要があります。それによって、ときには救いの手を差し伸べ、ときにはじっと見守り応援するので、私たち教員や保護者など、周りの大人の責任は、子どもたちにつらい気持ちを我慢させないことと、目標に向かって努力し困難に耐える力を身に付けさせることです。そして、with コロナの生活も、単なる「我慢」ではなく、この先にゴールと希望がある「忍耐」と捉えて、明日を信じて頑張りましょう。

四中演劇部が北多摩中学校演劇発表会で高い評価をいただき、都大会への出場が決まりました。顧問と部長さんからのコメントです。

■演劇部■

顧問 猪俣 裕紀

この作品「お楽しみは、いつからだ」は、富良野高校演劇同好会（現：演劇部）さんが、高校演劇の全国大会に進んだ台本です。そして、富良野高校演劇同好会さんが、【コロナ禍で生きる人々への熱い思い】を込めた作品でもあります。

この作品のテーマは【コロナに立ち向かう姿勢】です。それを「コロナ禍で思うようにいかない高校生たち」「社会の変化に翻弄される高校生たち」の姿を通して描いています。クライマックスは、ニコという女子の「よーし、行くか！」で終わります。

この作品の設定は、東京オリンピックも延期（3月）となった2020年4月のある日です。そのため、この1日で状況がよくなることはありません。しかし、女子バレー部のキャプテンで、不安を抱えるニコは「よーし、行くか！」と覚悟を決め、前に歩み出します。その隣には、同じくコロナに負けず、立ち上がるイチカやアンリがいました。

昨年度の学習発表会「この星はブルー」から、嘘のない舞台作りをテーマに、稽古に励んできました。小平四中の属する北多摩地区は、ここ4年で関東大会・全国大会出場校が4校あります。そのなかで、地区の代表に推薦され、都大会に行くことはとても高い目標でした。都大会では小平四中を背に、激戦区・北多摩の看板を背負い、精一杯の上演をしたいと思えます。

部長 深川 愛莉

夏から約4か月間、脚本を選ぶところから演出まで、皆で協力しながら練習してきました。最初は、部としてのまとまりがなく、また部員それぞれの都大会出場への思いが異なっていたため、どうやってまとめていくかが課題でした。二年生は昨年北多摩大会での悔しさを味わっており、今回選ばれなかったら都大会に行けるチャンスがもうなくなってしまうので、皆気合が入っていました。しかし、一年生はまだ入部したばかりで、大会の経験もないため、熱量の差が生まれてしまうのが心配でした。

二年生は以前に比べ、発声・演技なども上達し、自分から意見を出し合い、積極的に活動してくれました。その姿を見て、一年生も頑張ってくれました。集中力が必要な長時間の練習も、皆で一緒に乗り越えてきました。厳しい、辛いという気持ちよりも、演劇が、演劇部が好き、楽しいという気持ちの方が強く、だんだんと部も一つになっていきました。

大会当日は、緊張もしましたが、今までで一番良い劇が上演できたと思います。私たちはいつも通し稽古では「元気よく！ふざける！」ことを大切にしてきました。本番もそれぞれの自分の役割を楽しんでおり、自分たちの良さが出せたと思います。こうやって一人一人の努力が結果につながったと思います。結果を聞いたときは、皆泣きながら喜び合いました。そして、誰一人欠けても、この劇は生まれなかった、そう思いました。

都大会に向けて、私たちはまた練習を再開します。限られた時間の中で、皆で意見を出し合いながら、より完成度の高い劇をつくっていきたいです。忘れてはいけないのは、この結果が出せたのも、私たちの力だけではないことです。これまで支えてくれた先生方、先輩たち、応援してくれた家族、友だち、本当にありがとうございました。これからも演劇部の活動を温かく見守って頂けると幸いです。

■生徒の活躍■

卓球部 小平市秋季市民卓球大会 中学生の部

男子団体 優勝 男子Aチーム 女子団体 第3位 女子Aチーム

男子シングルス 準優勝 藤原 佑造 第5位 高橋 直希

女子シングルス 第3位 篠田 暖彩 第5位 楠本 紗也佳 第5位 本間 晴

※シングルス戦で入賞した5名は、10月に行われた第10ブロック大会の結果により、都大会出場が決定しています。

■1月の主な行事■

1日～3日	休日（学校閉鎖期間）	17日	専門委員会
4日	学校閉庁日	19日	中央委員会
6日	冬季休業日終	20日	避難訓練
10日	始業式 意見発表会	23日	生徒会朝礼
13日	移動教室前検診（1・2年）	25日～27日	スキー移動教室（1年）
16日	全校朝礼	29日～31日	スキー移動教室（2年）



※冬季休業中の12月29日（木）から1月3日（火）までは、学校閉鎖期間となり校内へは入れません。また、1月4日（水）も学校閉庁日となります。

【体罰根絶のための調査について】

体罰や暴力のない楽しい学校生活を構築するために、「体罰に関するアンケート調査」を実施します。12月9日（金）に、生徒が質問紙と関係資料を持ち帰りますのでご確認ください。質問紙は、生徒が記入し糊付けをして、12日（月）に提出してください。回答内容の確認は原則として管理職が行います。